



営農タイムリー！



防除所ニュース

2024年7月11日発行

★ 水稻のいもち病に注意！！ ★

京都府病害虫防除所より、
防除所ニュース 令和6年 第4号が発表されました。 (抜粋)

★ 水稻のいもち病に注意！！ ★

- ・ 6月中旬に行った巡回調査の結果、葉いもちの発生は平年比多い発生でした(表1)。
- ・ アメダスデータを基にいもち病感染好適日を推定するシステムモデル(BLASTAM)によると、6月中旬以降、いもち病の感染好適日が府内各地で断続的に出現しています(表2)。
- ・ 7月4日発表の近畿地方1か月予報では、向こう1か月の気温は高く、降水量は日本海側では多く、太平洋側では平年並か多いと予想されており、今後病勢が進展しやすくなると考えられます。
- ・ 今後、移植時の箱施用薬剤の効果が低下することから、伝染源となるいもち病の発生が目立つ場合は、治療効果がある薬剤などで防除を徹底しましょう。

表1 葉いもち発生状況(6月中旬調査)

項目	本年	平年値
発生ほ場率(%)	20.0	1.3
発病株率(%)	2.1	0.3

☆ 防除上の留意事項 ☆

- (1) 上位葉へ進展した**葉いもち**の病斑は、**穂いもち**の重要な伝染源となる。
- (2) コシヒカリ、ヒノヒカリ、祝など発病しやすい品種や、すでに**葉いもち**が多発している水田や山間部の水田では特に注意し、防除適期に薬剤防除を実施する。
- (3) 葉いもちの発生が多い場合は、治療効果がある薬剤(カスガマイシン剤:商品名カスミン剤等、フェリムゾン・フサライド剤:商品名ブラシン剤等)で防除する。
- (4) 防除の際には、周辺ほ場に農薬が飛散しないよう十分に注意する。
- (5) 農薬の選択に当たっては、使用時期(収穫前日数)や使用回数等の使用基準を遵守して適正に使用する。

表2 いもち病発生予察システム BLASTAM(アメダス)判定結果

発生指標 ● : 感染好適条件 1 : 準好適条件1 3 : 準好適条件3 ? : 判定不能
 2 : 準好適条件2 4 : 準好適条件4 - : 好適条件なし

一般社団法人 日本植物防疫協会

令和6年(2024年)		6月																														7月			
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	1	2	3	
京都府	間人	-	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	3	-	3
	宮津	-	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	●	●	3	-	-	●
	舞鶴	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	●	-	-	●	-	-	-	●	
	福知山	1	-	-	-	-	-	-	-	-	4	-	-	-	-	-	-	-	●	-	-	-	-	-	●	-	-	-	-	●	●	3	-	-	
	美山	3	-	-	-	4	-	-	-	4	-	-	-	-	-	-	-	-	4	-	-	-	-	-	●	-	-	-	-	●	●	●	-	-	
	園部	3	-	-	-	-	-	-	-	4	-	-	-	-	-	-	-	-	●	-	-	-	-	-	●	-	-	-	-	●	●	●	-	-	
	京都	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	●	-	-	-	-	-	-	-	3	-	2
	京田辺	4	-	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-

※ 好適条件 : 最も感染に好適な気象条件が整った日

湿潤期間中の平均気温が20~25°Cであり、湿潤時間が十分で、当日を含めてその日以前5日間の日平均気温が20~25°Cの範囲内

準好適条件 : 好適条件に続く感染に適した気象条件が整った日で、条件の違いにより1~4に分類される。

1. 湿潤時間は10時間以上だが、前5日間の平均気温が20°C未満
2. 湿潤時間は10時間以上だが、前5日間の平均気温が25°C以上
3. 湿潤時間は10時間以上だが、湿潤期間中の平均気温が15~25°Cの範囲外
4. 湿潤時間が湿潤期間中の平均気温ごとに必要な時間数よりも短い

いもち病

わが国の稲作にとって、最も重要な病害でありイネの生育期間を通じて発生し、イネの各部を侵す。

病徴と診断：葉いもちの病斑は、大きさ、色、形状に変化があり7つの病斑型に分けられる。病斑は、褐点、白点、紫黒点から始まるが、褐点型病斑の多い時は本病まん延のおそれはほとんどない。白斑または浸潤型病斑が多く見られる時は、多数の胞子が形成されしかもイネの体質が本病に感受性であることを示すので本病まん延のおそれがあり、発生が多い場合はズリコミ症状を呈する。出穂期になると、葉いもち病斑上に形成された胞子が伝染源となり、穂首、枝梗に褐色の病斑を作り白穂となる。

伝染経路と

発病条件：病籾および被害ワラで越冬した病原菌が1次伝染源である。翌年、病斑上に分生胞子を形成、飛散し、イネに付着する。いもち病菌の分生胞子発芽には水滴(少なくとも96%以上の空気湿度で水膜)を必要とする。また、10~35℃の温度範囲で発芽する(25~28℃が発芽適温)。菌侵入後、湿度は菌の進展に影響しないが、温度は病斑発現までの期間の長短に影響する(24~25℃で5~6、26~28℃で4~5日)。

本病の発生しやすい気象条件を整理すると以下のようになる。

- ① **本病菌の繁殖適温25~28℃が連続する時**
- ② **降雨日数と降水回数が多い時**
- ③ **湿度90%以上の日が連続する場合**
- ④ **降雨が多いことと関連し、日照時間が短い日が連続する場合**
- ⑤ **葉上で水滴が長時間保持される場合**

防除のポイント：

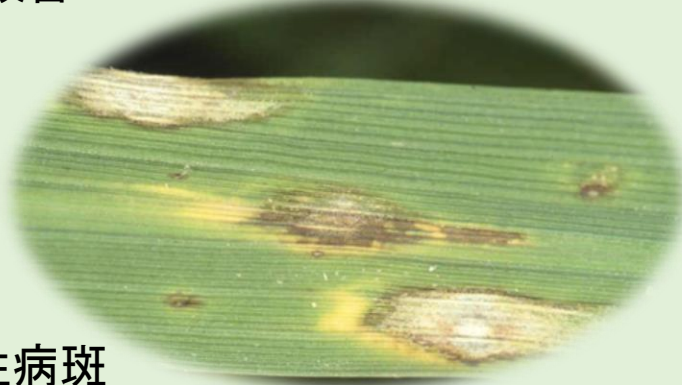
- 塩水選を行い不良種籾を除去する。
- 箱育苗では覆土を十分にし籾が露出しないようにする。
- 発病苗を本田に持ち込まない。
- 抵抗性品種を栽培する。
- 薬剤の特性を理解し**同一薬剤の連用をさけ、適正な使用をする。**



葉いもち被害



いもち病被害(ズリコミ)



いもち病・急性病斑



いもち病・慢性病斑

いもち病 主要防除薬剤(治療剤)

成分系	FRAC コード	薬剤名	希釈倍数、 使用量	使用時期 / 使用方法	本剤の 使用回数	成分別 総使用回数
オキサニミド (殺菌剤)	11(C3)	オリブライト 250G 豆つぶ	250g/10a	出穂10日前まで ただし、収穫 45日前まで	1回	1回
				出穂10日前まで ただし、収穫 45日前まで /無人航空機による散布		
ヘキサピラノシル抗 生物質(殺菌剤)	24(D3)	カスミン 液剤	1000倍 60~150L/10a	穂揃期まで	2回以内	4回以内(但し、種子浸漬 は1回以内、育苗箱への 処理は1回以内、本田では 2回以内)
			30倍 3L/10a	穂揃期まで / 空中散布		
			8倍 800ml/10a	穂揃期まで / 無人航空機による 散布		
ピリミジノンゾヒドラゾン (殺菌剤)	U14(U) 16.1(I1)	フラシンプロアガル	1000倍 60~150L/10a	収穫7日前まで	2回以内	2回以内:3回 以内
			8倍 800ml/10a	収穫7日前まで / 無人航空機による散布		
			30倍 3L/10a	収穫7日前まで / 空中散布		
			300倍 25L/10a	収穫7日前まで / 散布【ブームスプレーヤー】		
		フラシンプロアガル 粉剤DL	3~4kg/10a	収穫7日前まで	2回以内	